

粕壁地区

春日部八幡神社

ご祭神は

誉田別命 ほんだわけのみこと 【応神天皇】

息長足姫命 おきながたらひめのみこと 【神功皇后】

武内宿禰命 たけのうちすくねのみこと 【春日部氏の祖】

豊受姫命 とようけひめのみこと

◎註 春日部市以外の八幡神社は、武内宿禰命を除く三柱の御祭神であるが、春日部市内の八幡神社は武内宿禰を御神祭として合祀しているのは、特に春日部八幡神社の創建について当時の春日部郷の領主春日部氏が、鶴ヶ岡の若宮八幡宮をこの地に勧請したことよって春日部氏の祖先の紀之国の国主である紀貫之【きのつらゆき】：土佐日

記の作者【の先祖である武内宿禰【尊卑文脈に記載されている。】を合祀したものと伝えられている。

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳であるが、口碑によると、元弘年間【一、三三一〜一、三三四】新田義貞の武将春日部治部少輔時賢【かすかべじぶしようゆときかた】が、当境内地を居城としていた時、鶴岡八幡宮のご分霊を勧請して奉ったものと伝えられている。

『新編武蔵風土記稿』には、宿の鎮守なり、元禄年中、別当玉蔵院の住僧の書せし縁起に、昔元弘中新田左中将義貞の家臣春日部治部少輔時賢なるもの当所を領し多年相州鶴岡八幡を敬信し屢靈護を蒙りしゆへ遥拝の為則鶴岡を写してここに勧請すと云、因つて昔は新方の惣鎮守にて社宇莊嚴を尽くせしに其後遙かの星霜を歴て屢盛衰在りしが、今は又社殿備り頗る旧觀に復す。

末社弁天云々と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、八幡社「郷社」字浜川戸にあり、近郷数十ヶ村の総鎮守なり、誉田別尊を祭る。祭日九月十九日。相伝ふ元弘中新田左中將の家臣春日部治部少輔時賢なる者当所を領し多年相州鶴岡八幡を敬信し屢靈護を蒙りしゆへ遥拝の為鶴岡に擬して、此処に勧請すと云域内大杉古松等繁茂せり就中社前にある大銀杏二樹【元は三樹ありしが一本は近古枯れたりと云ふ】は鎌倉より飛び来ると云へり而して社宇は頗る莊嚴を尽くせり。

◎境内の北隅に松林の小高き所あり是れ即ち時賢の城祉なりと云ふ尤も地形の別に記すべき程のものに非ず下も古蹟の条と併せ見るべし又嘉永中当宿の民間根次郎兵衛なる者正三位千種有功【ちぐさのありとう：京都の公家で歌人】に二句の和歌を請ひ同志を結びて、華表【鳥居】の側に碑を建てり其の文は今茲に略すと記されている。

『武州粕壁八幡宮略縁起』【粕壁宿名主次郎兵衛が書いた文書：かな書の為解説し、要

約した。】には、新田太郎義貞の家臣新方庄春日部郷の領主春日部治部少輔時賢が元弘元年、鎌倉幕府に参勤の際、普段から八幡宮に対する信仰が厚く鎌倉に出府の際には八幡宮に参籠して家運の隆昌と住民の安泰五穀の豊穰を祈願していたところ、満願の日の夜明けに白髪・白髭の神像が現われ、日頃の熱心な信心に対し白煙の中よりご託宣があり、その方の住む所の草叢に一本の大木がある。そこに八幡宮を建てよとの仰せであつた。時賢は早速城へ帰り城内を見回したところ忽然と大銀杏が現われたのでこの地域を神域とさだめ八幡宮を勧請し、新方四十余郷の総鎮守として創建された。とある。

『春日部八幡宮氏子連名帳』【八幡神社所蔵文書】には、武蔵国埼玉郡新方庄八幡宮は、鎌倉大將軍旗下の大名春日部氏世々に居城の域地古隅田川を後にして大場沼・谷原沼を前に当たり一座の砂山杉松の古木鬱蒼たる処に鎮座ましまし新方四十余郷の宗祠にして城主の氏神と尊崇し奉る神社なり、境内除地壱町歩余其外免地の末社四方に羅列し毎年六月角力会・八月放生会・九月の神事月々朔望の神樂連綿として今に相続す。む

かしは元弘の年鎌倉鶴ヶ岡神木の銀杏社前に飛び来たり一夜に繁茂する大樹現に存せり今は氏子の村々を巡行し給うといひ伝えて社内に黄金の轡の音を聞くことあり靈驗いちじるしきが故に万民渴仰の頭をかたぶけ参詣の老若、朝夕たゆることなし往時永世の新方の諸村を勧進し銅燈を広前にかかげ宝暦の年四十余郷力を合わせて巨石の華表を建立す今又村々の氏子等御神楽を毎年奏し巡行守護の神恩を感謝し奉り且人々の名記を大帳に記し永く神殿に籠め奉り生前の加護子孫の永昌を祈り奉らむと希ふ所なり。

天保十一年庚子八月朔日。続いて別当の普門院・最勝院・玉蔵院と名主二名外宿役人以下氏子の名が記されている。

『都鳥の碑』【別名業平と八幡社の故事を伝える碑】

碑文の表面には、「隅田川は、むさしと下つふさの国の界なり、陸奥に住きかふ道にあたる所を春日部のうまやといふ、在原中将の、いざこととわん、都鳥とよめりし跡ながら、ふちとかわりて、今は小川となり、むかしのわたりは岡となりしが、元弘の年さ

が美の国の銀杏の一枝飛び来たりて、ひとよのほどにおひけり、其の神木のもと、鎮り
います神のみいずの、いやましに幸ひ給へるみやしろのあたりぞ、いざ舟にのれと言け
ん昔の名残りなりけらし、

正三位 有功

とわれつる、あとだにとめよ、都鳥

むかしは、遠きわたりなりとも、

神垣にたてる、ひと木をためしにて、

千々にさかえん、春日部の里

裏面には、新方四十余郷惣社春日部八幡宮は、春日部治部少輔時賢主、隅田川の岡に
造立せられる所なり、こたび千種殿に乞奉りて詠歌を碑面に彫刻す、又放生会再興のた
めに高田二反五畝三步を寄付して永世に伝ふるものなり。

嘉永六年五月立。とある。

◎社前の一の鳥居には、『新方荘惣社』の掲額がある。安政五年再建とある。

◎社前ご神木の前の灯籠には、『新方鎮守社』と刻まれている。天保三年とある。

◎明治六年「郷社」に列格。明治四十年四月幣帛供進社に指定される。

昭和二十四年四月三十日「宗教法人」の登録。

神社行事

正月初参り・二月節分祭・春祭二月十八日・例大祭十月十五日・秋祭十一月二十三

伝統行事

十一月の秋祭には、御神輿の氏子町内への渡御巡行が行なわれる。昭和五十七年から秋に社前で薪能が行なわれるようになった。

末社

弁天社の他多数の小社が祀られている。

◎「春日部天神社」古来境内地内に天神社が小祠としてあったが、平成三年改めて、九州

大宰府の天満宮に乞い奉り、ご分靈を勧請して新たに社前を造営し、敷地を整備した。
境内内地内の石碑

一、天神社の前に高さ約二メートル・幅約一・五メートル程の自然石の石絵馬がある。

碑文は、粕壁宿名主次郎兵衛孝熙のである。

春之日乃野部之 母里能下草爾不整 駒毛睦志九古曾

安政三年十一月晦日 七十三翁孝熙 志主青木三吉

二、駐車場入口右角に石碑がある。

「松園敬甫翁碑」 従二位勲一等榎本武揚篆額

翁諱敬甫松園氏武蔵国粕壁之人文化五年辰正月生聖護院、下命叙本山修験正大先達不動院霞下準年行事權大僧都法印號、仙乘院特許黄服蓋異數也登大峰葛城七回攀木曾御嶽廿七回維、新両部判而遷梅田村女體雷電兩社神職補大講義翁性行篤實餘、暇習字讀書以教育兒童諄々不倦闔郷頼其德明治一八年一月廿、七日病而卒齡

七十七配野上氏先卒男四人女五人四男恭光継家為同郷社神職明治二十六年九月門
弟子相謀建此之碎巖高森敏撰併書
裏面に百四十八名の名を記す。

八幡神社【元新宿】

ご祭神は、

誉田別尊 ほんだわけのみこと

【応神天皇】

息長足姫尊 いきながたらひめのみこと

【神功皇后】

武内宿禰 たけのうちすくね

【春日部氏の祖】

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳なれど、口碑によると、正親天皇の御代、天正二年四月【一、五七

四【北条氏の家臣関根家が常に信仰していた宇佐八幡宮のご分靈を勧請して建立したと伝えられている。

この地に八幡神社をお迎えするに当たって、関根図書助が常に使いたる強弓を放って其の矢の落ちたところこそ神慮に叶った所たりとして、この地を選んだという説が残されている。

関根家は、真藏宗氏が享禄年中頃【一、五二八】糟ヶ邊に兵乱を逃れて居住したと思われる。その居住地は現在の元新宿の関根製油所の付近と推定される。

関根図書助については、『新編武蔵風土記稿』の粕壁宿の項に、旧家者、九左衛門として、記載されている。先祖は某郡関根村を領し、即ち居城し在地名をもって関根を称すと云、其後真藏宗氏なる者、時の兵乱を避け当初に來りて隱棲す。宗氏卒後其子、父が菩提の為、彼の墓所へ庵室を結び真藏庵と名付け、其後願い上げて一寺とすと云、今の真藏院是なり、真藏より数代を経て天正年中図書と称せし者、北条氏に従ひ戦功によ

りて、氏繁より感状を賜ひ且つ鱗の紋を許さる外に深井佐枝へ円阿弥が奉りにて出せし文書及び御入国の後、岩槻城主高力より与えし書あり、凶書を経て今の九左衛門に及ぶと記されている。

関根村とは、現在の行田市大字関根である。

『新編武蔵風土記稿』には、八幡社二字、真藏院持ち、誉田別命を祭る。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、八幡社「平社」元新宿にあり、誉田別尊を祭る。と記されている。

◎大正十二年、関東大震災で本殿・拝殿共に全壊した。故老の伝えによると、この時民家も被害が甚大で住民等が協議して、この社を一時期「村社」八幡神社【大砂】に、お預けして民家の復興後、神社をこの地にお迎えすることにした。ところが、総代の代表者某氏の家に禍が再三ありて、住民は神様のお怒りと恐れ協議の結果、民家より先に神

社の再建に取り掛かり、大正十五年完成して現在に至ったと言われている。

◎昭和二十四年十一月二十五日「宗教法人」に登録。

神社行事

春祭二月十九日・例祭七月十五日・秋祭十二月二日

伝統行事

一、村社八幡神社の祭礼の際、御神輿渡御が行なわれると、当日は、この地の八幡神社に渡御されて一泊される習慣がある。

二、祭礼の日、区域内を分けて、宵宮の日に祭当番の家に神社から、金幣と太刀を奉じて祭壇に飾り、付近の人達と直盛【なおらい】をする習慣があった。

◎社前の右手に大銀杏の木がある。

この銀杏の木は春日部市内でも珍しい銀杏で、幹に乳房の様に「こぶ」が下がっている。【俗に乳銀杏と言われている。】

東八幡神社【大砂】

ご祭神は

誉陀別尊【応神天皇】
ほんだわけのみこと

息長足姫命【神功皇后】
いきながたらひめのみこと

武内宿禰【春日部氏の祖】
たけのうちすくね

比売神
ひめのかみ

豊受姫命
とようけひめのみこと

倉稻魂命
うがのみたまのみこと

素盞鳴命
すさのうのみこと

神大市比売命
かみおおいちひめのみこと

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳なれど、口碑によれば、粕壁宿が元和年中に【一、六一五】日光街

道の宿駅としてさだめられ、駅業務が始まった時、上宿・仲宿と共に新宿組が組織され、元新宿【当時は新宿】の住民が二、三男を残してこの地に転居し、宿場業務の旅籠屋・伝馬制度の夫役等に従事するようになり、関根家もこの地に転居して旅籠屋【仙台屋：仙台藩の御用宿を勤めるようになった。】を開業した。関根家の信仰する八幡宮をこの地に祠ることとなり、石清水八幡宮のご分靈を勧請したと伝えられている。

『新編武蔵風土記稿』には、「八幡社」誉田別尊を祭る。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、八幡社「村社」大砂にあり、誉田別尊を祭る。祭日九月十九日と記されている。

明治六年「村社」に列格。昭和二十四年「宗教法人」登録。

神社行事

例祭七月二十日

伝統行事

例祭日に御神輿の渡御が行なわれていたが、現在は不詳。

末社

「松の木稻荷」

由緒は不詳なれど、古来粕壁宿の松樹の里【現在の粕壁東…三枚橋町内会で粕壁小学校の裏手】に鎮座せるものを、明治四十四年十一月、ここ八幡神社境内に奉遷される。社前に『春日部駅松之樹の里』と刻まれた石碑が建立されている。

「豊玉稻荷」

往古粕壁宿川久保の金子豊次郎氏の屋敷神として鎮座ありしが、明治末期にここ八幡神社境内に奉遷される。

「雷電神社」

往古粕壁宿川久保に鎮座せるも、明治末期にここ八幡神社境内に奉遷される。

「天神社」

由緒不詳

◎境内内に多数の庚申塔が存在している。元は氏子連の地元に建立されていたものを関東大震災の際整理してここ八幡神社境内に移設統合されたものである。

秋葉神社【中央一丁目】

ご祭神は

ほむすびのみこと
火産靈命

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。古来よりこの地に鎮座し、火防の神として広く崇敬されている。

口碑によると、或る年の十二月、北西の風が強く吹く夜のこと、粕壁宿の名主多田次郎兵衛の邸内の裏手【多田家の屋敷は日光街道から現在の春日部駅西口広場あたり迄の

広大な屋敷であった。】に何物かが落下した凄惨な地響きがあった。家人が驚いて飛び出して見ると、六尺余りの大槍を携えた一人の六部【修験者】が立って居た。次郎兵衛は驚き騒ぐ家人を制止して、六部を客間に招じて丁寧にもてなした。数日後、六部は笈の中から一個の包みを取り出して次郎兵衛に与えると、別れを告げ風のように消え去った。

次郎兵衛が何気なくこの包みを解いてみると、中から現れたのは、秋葉権現の御神体であった。次郎兵衛はさては今の六部は秋葉山からの使者か、または秋葉権現の化身に違いないと怖れて、六部の降り立った場所に祠を建てた。これが当秋葉神社であると伝えられている。

史料の『新編武蔵風土記稿』・『武蔵国郡村誌』には、その記載がない。この神社は、元は春日部駅西口左手の銀杏の木がある場所に鎮座していたが、西口区画整理事業によって現在地に移転した。

神社行事

春祭四月十八日・秋祭十二月十八日

伝統行事

不詳

伝説

昔、粕壁宿には、河内屋火事・ろうそく屋火事・島村火事・妙樂院火事等の大火があった。それらの火事の鎮火する都度、大きな火の玉が、この神社に落ちたと伝えられている。或る年三枚橋組の喜蔵床が火元で大火になり、宿の家並みが類焼し火は新々田【現在の一宮町内会】の源徳寺にせまった。この時、寺の山門に異様な風体の人影が現れ、手にした団扇のようなもので降りそそぐ火の粉を降り払うと、不思議や風向きが変わり火事が鎮まり寺は難を免れた。人々はこの奇跡を神の加護と信じたという。

また、この神社の祭日に雨が降るときは、神に怒りの示現であると信じられている。

境内内の石碑

社前に奉納記念碑がある。碑文はつぎのとおり。

かぐつちの　　神のいかりの

しずめとや

あきはの森に　　雨は降るらん

明治十七年三月

春日部孝純

【春日部孝純とは、元粕壁宿名主で初代粕壁町長多田亀十郎】

春日部稻荷神社【浜川戸】

ご祭神は

うがのみたまのかみ
倉稻魂神

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳なれども、故老よりの伝承によれば、昔、春日部氏が此の地に築城の際、氏神として祭祀し、領土安穩・五穀豊穰を祈願したものであると伝えられている。

筆者【須賀芳郎】は、昭和五十五年、社殿改築・遷宮の際、氏子会長の依頼を受け、故老よりの伝承と史書の閲読を基に推察して、当社の由緒を記した。【現在社前入口に掲示】これは、『春日部』の地名から類推して記したものである。

当神社は『春日部稻荷大明神』と申し上げ、ご祭神は『倉稻魂神』と申し上げます。縁起・由緒については詳らかではありませんが、『春日部』と言う地名と、この場所より推察して当神社の由緒を記します。

『春日部』と言う地名は、古代の雄略天皇【二十一代】の期【四七八】に大和朝廷の属地として定められ、皇女春日大娘【かすがのおおいらつめすめらひめ】の御名代部【みなしろべ】として命名された地名であります。御名代部を統治・管理するために派遣された「在庁官人」がこの地に居を構えていたことが、遺跡の発掘により推測されます。

中世の時代になって、武士団が結成され、この地に住していた領主は、武蔵国荏原郡に住した本姓紀氏の一派であり、在地名『春日部』を名乗ったと言われる豪族であります。

当社の所在するこの地は「春日部氏」の屋敷跡であり、『春日部稻荷大明神』は春日部氏の屋敷神として京都伏見稻荷大社より勧請し祭祀されたものであります。創建の年代を案ずるに伏見大社は奈良時代の和銅年間とあり、それより降ること二百年位と推定されるので、平安期と思考され、およそ千百年位以前の創建と推察する次第です。昭和

五十五年庚申六月

『新編武蔵風土記稿』には、「稻荷社」と記されているだけである。『武蔵国郡村誌』には、「平社」字浜川戸にあり、『豊受姫命』を祭る。と記されている。

明治六年「無格社」の指定を受ける。昭和二十四年三月二十五日「宗教法人」に登録。

昭和四十七年十二月十九日、埼玉県より環境緑地保護地区に指定される。

神社行事

例祭宮本町内会は二月初午・氏子会は三月初午

伝統行事

八幡神社の例祭には、『御神輿』渡御の際、八幡神社『御神輿』の先頭になり、氏子町内会を巡行する慣習がある。

雷電神社【粕壁】

ご祭神は

板倉雷電大神のご分靈

ほのいかづちのおおかみ
火雷 大神

おおいかづちのおおかみ
大雷 大神

わけいかづちのおおかみ
別雷 大神

すがはらのみちざね
菅原道真

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳なれど、口碑によれば、元禄三年【一、六九〇】七月二十六日の創建と伝えられている。

当時、旱魃続きのため近隣の農民が相集まり、此所に大池を掘り、盛り土の上に板倉雷電大神のご分靈を勧請祭祀し、雨乞い祭を行ったと伝えられている。板倉雷電大神の

御神徳は、火・水を主宰され、人間・動植物の生命発展且つ生物の生成育成に当たり、五穀豊穰・厄除け開運等に靈験があるとされている。

菅原道真は、『天神様』と呼ばれ学問の神様として多くの信仰を受けている。

考古学者によると、この土地は七世紀頃の古墳であると推定されている。

故老の伝えによると、この付近の耕地は、俗に山口田とも言われている。それは、山口家本家の祖庄兵衛という人が伊勢国平野村出身で、江戸時代初期の日光東照宮造営の際、宮大工であったので、幕府のお召しに応じて日光に赴き、ご造営工事終了後、日光街道を経て帰国の途次、粕壁宿に立ち寄りそのまま定着し、このあたりの土地を開墾して農民となったと山口家文書にある。当時この古墳の大木に落雷があり、農民が雷神の怒りと怖れ、板倉雷電大神の、ご分靈を勧請し、お祠りしたとも伝えられている。【この土地あたりに山口田の親田があったと言われている。】

『新編武蔵風土記稿』には、雷電社の記載はない。

『武蔵国郡村誌』には、雷電社「平社」字八木崎にあり、別雷命を祭る。と記されている。

明治六年「無格社」に指定。昭和二十四年四月三十日「宗教法人」登録。
神社行事

春祭四月二十六日・例祭七月二十六日

伝統行事

不詳

神明社【春日町内会】

ご祭神は

おおひるめむちのみこと
大日靈貴尊【天照大神】

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳なれど、口碑によると、天明年間、当初【粕壁宿名主見川家の屋敷】に居住していた九法四郎兵衛が、屋敷内を開墾中、土中よりご神体と鏡を発見した。名主はこれを屋敷内に祭祀し、字【山中】の氏神として崇敬したと伝えられている。

『新編武蔵風土記稿』には、この神明は記載されていない。

『武蔵国郡村誌』には、神明社「平社」宿の字上山中にあり天照大神を祭る。祭日六月二十一日と記されている。

明治六年「無格社」に指定。昭和二十四年十一月二十五日「宗教法人」登録。

神社行事

夏祭七月二十一日・秋祭十二月十四日

伝統行事

十二月十四日には、境内で歳の市が開かれ均衡・近在から多くの人々が集まり、宿内も商人が参加して賑わいを見せていた。

八坂神社【牛頭天王社とも言う。】【粕壁】

ご祭神は

素盞鳴尊 すさのうのみこと

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳なれど、『武州古文書』の中に、延文六年【一、三六一】の市場

祭文に『下総州春日部郷市祭成之』とある。

これは、春日部市に市場が開かれ、市神様に祈願したときの祭文であることがわかる。春日部では、近在の農民の経済流通の手段として、四・九の日に市がたてられ、米の相場・反物の取り引き・生活物資の取り引き等が盛んに行われていた。中世の頃は物と物の交換市であったようである。この市は、昭和二十九年頃まで盛んであった。【これを六斎市と言う。】春日部付近では、越ヶ谷・岩槻・杉戸宿でそれぞれ市が開かれていた。

このことから類推して、この神社の創建は中世の頃と思考される。

『新編武蔵風土記稿』には、この神社の記載はない。

『武蔵国郡村誌』には、八坂社「平社」宿の東方新々田【現在の一宮町内会】にあり、素盞鳴尊を祭る。祭日六月十五日と記されている。昭和二十四年「宗教法人」登録。

神社行事

七月九・十二・十四日に、祇園祭【天王祭】

伝統行事

戦前は、この祇園祭は七月九・十二・十四日に行われ、九日は、御仮屋に出御して宵宮祭が行なわれ、十二・十四日は各町内会の『御神輿』が繰り出して空き地には野芝居・サーカス等の興業が催され、賑やかにお祭りが行なわれていた。中には、威勢の良い『御神輿』があり、喧嘩神輿の騒動もあった。その都度町内会役員の苦労は大変なものであった。十五日には、『御神輿』が町内渡りで担ぎ込み宿内を巡行していたが、若者が少なくなつて担ぎ手が減少したため、牛車で巡行することもあった。

戦後一時期マッカーサー指令によって祭典は中止されていたが、昭和二十二年【一、九四七】に『新憲法』が制定發布され、そのお祝いに手作りの「御神輿」が担がれ、昭和二十四年に『御神輿』の渡御が始まった。しかし、市街地での『御神輿』を担ぐことは禁止されていたので、やむなく内牧地区民の承諾を得て、内牧地区まで出向いて若者

達は『御神輿』を担いだ時期があった。その後、春日部町連合青年会が春日部町警察署と協議して、『御神輿』の渡御の方法を定めた【神社に向かう『御神輿』は担ぎ渡御するが、帰りの『御神輿』がすれちがうときは、道端に下ろして休み、相手方の『御神輿』が通過後に担ぎ、自分の町内会へ戻る方法にした。】ので、市街地で祭礼を行うようになった。その後、若者達のサラリーマン化が進み、若者の集合が困難なことと、祭経費の支出に各町内会が苦慮するようになり、一時期『御神輿』の渡御を休止することになった。その後、昭和五十一年より春日部市観光協会の主催によって、夏祭りパレードと名称を変え神社信仰に関係なく祭典を催すことになり、毎年『御神輿』のパレード渡御が行なわれるようになった。

江戸時代には、粕壁宿名主次郎兵衛が書き残せし『古文書』の中、『粕壁宿用留』と『公用日記』に、幾つかの天王祭についての記事がある。ここでは、文政八年【一、八二五】の『天王祭一件御糺口書被仰付』と題して天王祭礼一件について、『其宿天王

祭礼之儀ニ付、相糺儀有之間宿内不差支支様取計置、重立候役人共両三人明廿一日無相違罷出可相届もの也』六月廿日
伊奈半左衛門

武州埼玉郡粕壁宿名主・問屋・年寄と言う、名主外役人が呼び出されて、お調べを受けたことが記されている文書がある。

この内容を要約すると、つぎのような事項が記されている。

「天王祭礼は、毎年、年当番として二町内が携わり、九日に仮屋と御神酒所を設けて、ご神体の『御神輿』を仮屋に移し宵宮とし、十二・十四日は祭礼日で、子供達が太鼓を叩く『御神輿』は宿内を渡御する風習であった。しかし、各町内も『神輿』や素盞鳴命を乗せた山車【当時の山車は今内出町内会と一宮町内会に部品が保存されている。】を作り祭礼を祝っていたが、この当時幕府よりの御法度のお触れ書きが出され、奢侈禁止令が出されていたにもかかわらず、上宿・仲宿・新宿組では、祭礼に便乗して空き地を利用して路上まで華麗な飾り付けをしたり、手踊りの師匠を雇って舞台を設け、浄瑠

璃の催しをしたことは、御法度を弁えぬ仕業であると、叱られた【註飾り付け等とは、箆や樽・むしろ・反物・縄等を利用して、大蛇や宝船の飾り物にした、また、手踊りの師匠は、この時関宿の祭礼に向かう浄瑠璃の一行が宿内に泊っていたのを知り、雇って催したこと。】上、重立った人達に過料・手鎖一ヶ月の罰を課せられたと記されている。

◎江戸時代から伝えられている行事として、六斎市の四・九の日が初午の日になる年は火災が多いと言われている、六斎市の取締役と下組の代表者が境内に集まり、社前に仮設の家を造り祝詞を奏上し火防を祈願してその家に御神燈を移して炊上げる行事が行なわれていた。昭和二十二年まで行なわれていた。江戸時代の名主文書にもこのことが書き残されている。

日枝神社【一宮町内】

ご祭神は

おおやまさのみこと
大山咋命

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳なれど、故老の伝承によると、江戸時代初期に山王様として、この地に勧請されたという。

『新編武蔵風土記稿』には、この神社の記載はない。

『武蔵国郡村誌』には、日枝社「平社」宿の南、字新々田【現在の一宮町内】にあり大山咋命を祭る。祭日六月十五日と記されている。現在は一宮町内会が管理している。

神社行事

祇園祭の際、御仮屋を設けて『御神輿』が出御して、夏祭りパレードに参加している。

伝統行事

不詳

その他

境内地の左側に、自然石の庚申塔がある。

三囲稲荷社【内出】

ご祭神は

不詳

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳

この稲荷社の鎮座地は、元は現在の春日部中学校の校庭にあった。昔は、高さ一・五メートル程で約十平方メートル位あり、赤松が数本生えていた塚があり、その上に鎮座

していたが、中学校の建設により、現在地【東武鉄道金山踏切際】に移転した。

『伝説』によると、この『みめぐり稲荷社』は、昔、近江国三井寺の僧が靈夢に現れた祠を尋ねて、この地に来て祠を発見し、荒れていた祠を改築したと言う。その時、祠の下から「壺」が出土したので、蓋を取り中を改めたところ、右手に数珠を、左手に稲穂を持った神像が納められていた。僧は神像を取り出して拝んだその時、突然一匹の白いキツネが現われて、この神像のまわりを三度巡って、その姿が消えてしまったと言う。

「キツネ」は稲荷様のお使いと言われているところから、この神像は稲荷大明神であると信じて、この祠に祀ったと伝えられている。社の名称も、『三囲稲荷社』【みめぐりいなりしや】と村人等に伝えられたと言う。また或る時、この祠の近くに住む老婆の家の前に、母キツネが倒れており、そこに子キツネが乳房を吸っていたのを発見して、老婆は憐に思っ、この子キツネを拾って育てていたところ、不思議な事に、この子キツネは良く吉凶を知らせてくれるので評判になり、老婆は他人の運勢を占うようになった

と言う話が伝えられている。更に大正の初期、稲荷社が現在地に移転された当時のことであるが、近くに住む男が、或る日、突然この祠の中にこもって、何かを訴えるように祈り続けて動かなくなってしまった。家族が如何に説得しても、また近所の者が心配して説諭しても、全く動じないという事件があった。と言う伝説が残されている。

神社行事

字金山の付近の住民が、初午祭りを行なっている。

◎註 東京都墨田区にも『三囲神社』がある。場所は東武鉄道浅草駅の鉄橋の手前左側に高くそびえる神社が『三囲神社』と言われている。推定するに筆者の私が、昭和五十六年NHKFM埼玉で『東京の地名と春日部市付近の地名』と題して放送した中에서도述べているが、この伝説を基に江戸時代の開拓者が開墾地のこの地域に建立した神社ではないかと思考される。

浅間社【浜川戸】

ご祭神は

このはなさくやひめのみこと
木花咲耶姫命 【瓊々杵命の妃】
ににぎみのみこと

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。浅間山の信仰の起源は元亀・天正年間頃と伝えられている。

『仙元記』によると、弘化二年【一、八四五】六月、暴風雨によりこの山が崩れたので、山の形を整えるために、粕壁宿・幸手領・岩槻領・新方領等の近郷から多勢の人達が集まり「ザル」と弁当を持参で崩れた山に砂を運び盛り上げたと記されている。『新編武蔵風土記稿』・『武蔵国郡村誌』にはその記載はない。山頂には『不弔大神』と刻まれた二メートル位の碑が建てられている。登山口には禊教派丸岩講が奉納建立した石の鳥居がある。その傍らに「ふじせんげんしゃ」と刻まれた石柱がある。

◎浅間山の信仰は、駿河国不二山麓の白糸の人穴で、南行尊師が行をした時、木花咲耶

姫命の霊が現われて「世は將に兵乱の時なり、汝国家を泰平ならしめよ」との、お告げがあつたという伝説がある。徳川家康は其の地に来て、過去の夢物語りに聞かされた地に神社を建て、木花咲耶姫を祭神として祀り、幼児の初山に登ることは全ての「けがれ」を払うことであるとされた。これが仙元神社の始まりであると伝えられている。当地の浅間山も毎年七月一日には初山と称して、新生児の健康祈願に登山参拝する習慣がいまも行なわれている。

また、江戸時代の天保十四年【一、八四四】に書かれた日光宿村大概帳には、最勝院が別当として管理している。なお、明治十八年の粕壁宿地誌編輯には、祠官松園泰光・祠掌春日部孝純【名主八郎】と記されている。

神社行事　七月一日の初山

伝統行事　不詳

◎この山には、富士山に象って登山口から頂上までの間に、一合目から順次八合目まで

の道標が建てられている。

この地域は埼玉県緑地保存地域に指定されている。

◎なお、故老からの伝承によると、この山は中世の春日部氏の城の物見台として使用されていたと言われている。また、考古学者によると、中世の春日部氏の製鉄遺跡から考えて、製鉄の登り釜の遺跡と推定されている。